

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

編集後記

| | |
|-----|---|
| 雑誌名 | 日本文学誌要 |
| 巻 | 15 |
| ページ | 64-64 |
| 発行年 | 1966-06-30 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/00019158 |

編集後記

▼本号は、本年度としては第一回目の発行であり、65年度編集委員会としては最後の仕事ということになる。それだけに、誌面をより充実させたいと希ったが、益田勝実・表章両先生をはじめとして小林氏・国本氏の論考で、それが実現できたのはまことにうれしい。御多忙にもかかわらず、編集委員会の無理な願いをお聞き入れ下さった執筆者の皆さんに厚く御礼申し上げます。

▼ところで、御覧のとおり益田・表両先生の論文が共に分載ということになってしまった。責任はすべて編集委員にあり、何ともお詫びのしようがない。続きは第17号に掲載することになっていることを報告して読者諸兄姉のお許しを得たい。第15号から17号へと、一号あいだをおいてしまうのは、第16号が国文学会創立四〇周年記念の特別号として予定されているためである。

▼七月一日より郵便料の値上げ。編集関係では誌要・会報の送料が大幅にふえ、校正刷発送費の増加も軽視することはできない。学会運営費のうち、発送連絡費等の比率がますます高くなることは必定である。値上

による実質的被害は学会（国文学会のみならず）が最も大きいといわれているが確かかなようだ。今後もおそらくあらゆる面での物価上昇が続くであろうが、われわれは常に監視の目を怠ってはなるまい。

▼本号で65年度編集委員会による編集は終ることになる。13・14号、それに15号を担当し、年三回発行という点だけは何とか実現することができた。第12号の編集後記で、近藤健氏が「年三回発行、さらには季刊への足がかりになれば良いと思う」と書いているが、少なくともその第一階段だけは成就した。近藤氏をはじめ全会員諸氏にも喜んでいただけるものと思う。さらに一步進んで季刊にまで発展させてもらいたいと思うのはわたしだけではあるまい。

▼誌要の発行回数についてはともかく、その編集方針についてはいろいろ異見があるようだ。もちろん委員会は確固たる方針確立に意を用いて編集をすすめてきた。しかしその解答は早急に出るものではなく、現段階では実際に編集の仕事をすすめながら、誌要の充実を計り、次第に明確なものにしてゆくのが肝要かと思われる。建設的な御意見を聞かせて頂ければ幸である。（片桐）

投稿規定

- 一、宛先は法政大学国文学会
- 一、枚数に特に制限は設けませんが、なるべく、30枚前後、40枚以内。
- 一、内容は、日本文学・国語学・国語教育に関するもの、但し採否は編集委員会が決定します。
- 一、論文掲載の場合は抜刷三〇部を贈呈します。余分に御入用の方はお申出下さい。但しその分は実費を頂きます。

一九六六年六月三〇日発行

日本文学誌要 第一五号

編集者 法政大学国文学会

印刷者 東京都中央区銀座東三ノ七
東銀座印刷出版株式会社

電話東銀座（542）三九四一

発行所 東京都千代田区富士見町
法政大学大学院内

法政大学国文学会

電話東京（262）二三五一番
振替東京 六九四三番